◇エッセイ◇

「学び」と教材

西田晃一

♪思い込んだら、試練の道を…
♬苦しくったって、悲しくったって、
コートの中では平気なの…

1970年代に一世を風靡したアニメの主題歌である。「苦しい」「試練」を乗り越えた先に輝かしい未来が待っている。主題歌はそんな世界観を表現しているのだろう。

人が何かを達成しようとするときには必ず、「試練」つまり「苦しい」ときがある。その苦しみを乗り越えた人だけが、達成の喜びと、さらなる目標を見いだせる。これはスポーツに限った話ではない。学習活動においても同じではないだろうか？

詰め込み教育に対する反省から、「ゆとり」教育が始まった。問題発見・解決能力の重要性が指摘され、「総合的学習」が始まった。そのたびごとに「学び」は「楽しい」と強調されてきた。「楽しい」ことが悪いわけではない。「学び」は本質的に「楽しい」。しかし、気がつくとこの「楽しい」から「しい」が抜け落ち、「楽」だけが残ってしまったように思う。「楽」だけで、「学び」は成立するのだろうか？

本稿では、私が本年度春学期に行った実践を振り返りながら、日頃感じていることを一人語りしてみようと思う。時代遅れの議論を承知で…。

本年度春学期に私は、実習系のある授業で一つの試みを始めていた。授業で配付する資料を電子媒体にする、つまりペーパーレス化の試みである。様々なe-learningシステムが開発され実用に供されている昨今に、何をいまさらという向きもあろう。どのような試みであったのか、まずはその概要を紹介しよう。

対象とした科目は、情報とコンピュータに関する基礎的なリテラシーを養う実習科目である。この科目では、受講生は一人ずつコンピュータに向かって課題を実習する。利用される教材は、実習用テキストと配付資料である。実習用テキストには、様々なテーマに関連する基礎知識の解説と課題がまとめられている。一方の配付資料は、課題を行うために必要な情報や補足説明などがまとめられており、授業担当者が必要に応じて配付する。私が試みたことの一つは、この配付資料を電子化したことである。ファイルは、pdf、Wordドキュメント、html（ホームページ）の3種類。その時々の課題内容に応じて使い分けた。例えば、課題を行うための詳細な手順を書いたワークシートは、pdfファイルとした。課題の結果をもとに考察を求めるようなケースでは、Wordドキュメントを配布し空欄を埋めてもらった。ホームページを作成する課題では、配付資料をhtml化し、配付資料そのものが例題となるようにした。配布方法もその時々の課題との関連で変更した。電子メールに添付して配布したこともある。システム内の共有フォルダを利用したこともある。ただし、いずれの場合にも印刷物は配布しな

かった。電子的に配布した資料を「印刷してはならない」と禁じたことはなかったが、授業時間中にそのようなことを試みている学生には、幸いにして(?)気づかなかった。

もう一つの試みは、課題の提出についてである。こちらも、可能な限り電子的に処理させた。ある時は、電子メールに課題ファイルを添付させた。また、ある時はInformation System（関西大学が運営する学生・教員向けホームページで、各種連絡や案内に加えて、課題提出などの授業支援機能を有する）を利用させた。

なぜこのようなことを試みようと思ったのか？　理由の一つは、対象となる学生が情報系学部の学生であるということだろう。紙媒体（実習の約1/4は紙の資料を配付した）以外の様々な媒体で教材を提示することで、コンピュータを利用した情報処理について多様な側面から慣れてもらいたいと考えたからである。同時に、大学内で利用可能な教育支援システムについても慣れて欲しいと考えた。もう一つの理由は、学生が普段行っている「学習」活動について見直す契機を作りたかったからである。特に、授業の際に配布されることの多い資料や、自分が作成する「ノート」について、見直して欲しいと考えたからである。

学生たちはこの試みをどのように受け止めたのであろうか？　二つの機会を捉えて感想を聞いてみた。一つは授業評価アンケートに追加項目を設定して、もう一つは授業中に「感想を書く」という形で募った。

自ら試みておきながら言うのも変だが、学生の評価は低いだろうと予想していた。理由はいくつかある。例えば、教室に設置されている学生用コンピュータの画面は小さい。配付資料を提示しつつ課題を行うには、提示窓を頻繁に切り替えなければならない。これは厄介なことである。それに、紙に比べるとメモ等の書き込みがしにくい。もちろんそうしたことは、教材作成時に予想できることである。したがって、配付資料は、紙で配布するそれに比べるとかなり詳しく、そしてレイアウトや配色にも気を遣った。

授業評価アンケートの結果は、予想に反しておおむね好評であった（表1参照）。1（全くそう思わない）～5（強くそう思う）の5点評価だから、それほど悪い評価ではないだろう。配付資料でも、課題提出でも、ペーパーレスの試みは総じて学生たちに受け入れられているということになる。

それでは、学生たちはどのような点を評価してくれているのだろうか？　春学期最後の授業時に、今後の教材開発と授業研究を目的として、自由記述による意見を求めた。その際、意見を述べるポイントとして、a）良かった点、b）困った点、c）改善点、d）その他（自由意見）という4点を示した。

まず、全体的な主張の方向性が肯定的か否定的かを検討してみた。その結果、私が試みたペーパーレス化に対して、はっきりと「紙

表1　アンケート項目と平均評定値

項　　目	平均評定値
PDFやWord文書、ホームページなどを利用した配付資料は使いやすいと思いますか	3.75
課題提出先としてのInformation Systemは便利だと思いますか	4.30

の方が良い」と述べたのは、1割程度であることがわかった。「先生が頑張っているんだから」という配慮が働いているとは思うが、それにしてもこの結果は意外であった。授業評価アンケートの結果もそうであるが、正直なところ、もっと厳しい評価を下されると思っていたからである。

学生たちはどのような点を「良い」と評価してくれていたのだろうか？　具体的に理由を書いてある（「ペーパーレスは良いと思います」というように、具体的な理由を書いていない意見が相当数あった）なかで一番多かったのが、「この方法なら（配付資料を）なくさないし、（持ってくるのを）忘れない」ので良い、というものであった。こんなことが…。これと類似の指摘で相当数あった意見が、「かさばらない」、「整理が面倒くさくない」などであった。ファイルだって、ちゃんと整理しておかなかったら分からなくなると思うのですが…。「資源の節約」になるから良いという意見も、「なくさなくて良い」と同じくらい多かった。配付資料を「無駄な紙」と表現されると、正直なところ辛いですねぇ…。もちろん、頼もしい意見も少なからずあった。例えば、「資料配付の時間が節約できる」、「課題以外の利用法にも詳しくなった」などである。学部の特徴に鑑み取り入れた工夫だけに、このように理解してもらえるとホッとする。

逆に学生たちは、どのような点を困ったと指摘しているのだろうか？　一番多かったのは、「（複数の窓を同時に表示すると文字が小さくなるので）見にくい」「（窓を頻繁に切り替えなければならないので）煩雑」という意見である。これは、予想通りであった。もちろん工夫次第で画面切り替えの頻度は大幅に減少する。そういう要領をつかむのも、リテラシーのひとつだというと、学生たちに叱られるだろうか？　次に多かったのが、「可搬性」への不満である。より具体的には、「自宅で参照できない」という意見であった。確かに、ホームページの形式で示した資料は、当該ページの閲覧範囲を学内に限定した。したがって、「自宅から（インターネット経由で）参照できない」という指摘は的を射てるかもしれない。しかし、その他の資料はファイルをそのまま個人領域（我が学部の学生は学部内ファイルサーバに各自のネットドライブを有する）にコピーさせたのだから、持ち帰りは自由である。配布した資料ファイルを持ち帰ってはならないと禁じた覚えは一度もない。特別なセキュリティーを施した覚えもない。だから、個人領域に保存したファイルを持ち帰ることはいともたやすい作業である。ホームページ形式の資料にしても、ページごと保存して持ち帰ることも出来よう。むしろ、紙のようにかさばらない（多くの学生がこの点を良い点として指摘した）分だけ可搬性は高まったと思うのだが…。もちろん、理にかなった指摘もある。資料を見るためにわざわざコンピュータを起動しなければならないのは煩わしい、と。仰るとおり。でも、配付資料は、コンピュータを利用した実習課題のためにあるのだからねぇ…。

課題提出時に学生たちが感じる不満は、応答性である。要するに、「提出できているのかどうか直ぐに確認できない」という点である。特にInformation Systemを利用した提出で、この不安が高いようである。現在のシステムは、担当教員が「確認」をチェックしない限り、学生には提出できたかどうかを知る手だてがない。提出課題を確認するのは教員として当然の義務であろうが、リアルタイムに確認するのはなかなか難しい。また、「確認」というボタンをチェックする以上はやはり、課題内容まで確認したいと思うのが心情

である。しかし学生が求めているのは、どうやらそのレベルではないらしい。要するに、課題のファイルが課題提出用Webサイトに保存できたのかどうか？、その１点なのである。だから、Information Systemが自動的に応答してくれると、学生たちのこうした不安は解消されると思うのだが、いかがだろうか？　これを横着だといわれたら、返す言葉はないが…。

大変残念なことに、「(資料に) 書き込みがしにくい」という指摘は、非常に少なかった(皆無ではなかったが)。私自身は、窓の切り替えの煩雑さと同じくらい、この点を指摘されるものと恐れていた。恐れていたというよりは、期待していた。つまり、期待は見事に外れた。学生が授業中にノートを取らなくなったのは今に始まったことではない。講義科目ですらそうであるから、コンピュータを使いながらの実習科目でノートを取る学生が少なくても不思議ではない。しかし、である。どんなに詳しく書かれた資料であっても、完全ということはない。学生それぞれに個性があるように、理解の仕方も、疑問の持ち方も個性があるはずだ。さすれば、それぞれが自分の知識に照らし合わせて、異なったメモを資料に書き加えるのは、ごく自然な姿である。したがって、「メモが取りにくい」「書き込みがしにくい」という指摘はもっとあっても構わないと思うのだが…。

いまどきの大学では、プレゼンテーションソフトの使用や配付資料は、いわば当たり前となっている。学生たちの理解の助けになるのであればと、それなりに工夫を凝らす。しかし、そうして作った資料・教材は、本当に学生の「学び」をサポートしているのだろうか？　ただ単に、学生たちが「楽」する手助けをしているだけではないのか？　私が、資料を作成しながら、常に抱いている懸念である。教える側が、プレゼンや配付資料作成で味わっている「苦しみ」は、学ぶ側にも必要ではないのか？　試験勉強という形ではなく、まさに「学び」として。教える側だけが一方的に苦しみ、学ぶ側はそれを「楽」して消費する。こんな構図が、「学び」を創造しているとは、到底思えない。

考えてみれば、今回の試みは、「紙」を「電子情報」に置き換えただけである。実際には、媒体の違いを考慮した加筆修正を行ったわけだが、それは事の本質ではあるまい。そうした試みに対する学生たちの感想は、私の思惑とは必ずしも一致しなかった（この手の試みは常に「そういうもの」だが…)。企画意図を言語化して学生に伝達しなかったからだ、と指摘されるかもしれない。しかし、一から十まで言語化して伝えることが良いとは思わない。学生が自ら気づくべき事柄もたくさんある。

そもそも「学び」とは消費行動なのだろうか？　否。「学び」とは、きわめて創造的な活動だと思う。創造的な活動には「苦しみ」が伴う。昔から、「産みの苦しみ」というではないか。「思い込んだら…」「苦しくったって…」なのである。そうした学びをサポートする重要なツールは、学習者自身が作成する「ノート」だと思う。ノート作りというのは、非常に高度な創造的活動なのである。そのプロセスは決して「楽」なものではない。私自身、いまだに満足のゆくノートが作れないでいる。しかし、よく考えてノートを作成した人は、高度な知的生産活動の結果として、すばらしい知識を身につけることが出来ると思う。それは決して、資料をコピー＆ペーストすることでは得られない世界なのである。

そのような「創造」を支える教材とはいかなるものなのか？　悩みはつきない。